鹿嶋神宮＜茨城県＞　香取神宮＜茨城県＞

古代　大和朝廷による東征の戦略拠点

まちあるきの考古学

利根川下流に広がる日本一の水郷地帯。
これを挟んで、鹿島神宮と香取神宮が鎮座しています。
両神宮は常陸国と下総国の一之宮で、いまも多くの参詣者を集めています。

どこまでも平坦なこの地にあって、わずかに高い場所に両神宮は立地しています。

両神宮に共通するのは、大樹に覆われひっそりと佇む広大な境内。
そして、水郷の水面に凛としてたつ一の鳥居。
両神宮の水面との強いつながりを感じさせます。

奈良・京都などの畿内が日本の中心であった時代、東国の辺境に座した両神宮は、古代日本史において重要な役割を果たしてきました。

近くのまちあるき　**石岡**　**土浦**　**水戸**

鹿嶋神宮

水郷に座す古代史における両神宮

鹿島神宮の祭神は、武甕槌命（タケミカヅチノミコト）
香取神宮の祭神は、経津主命（フツヌシノミコト）

両神は、出雲の国譲りにおいて、強談判の末に大国主命に国譲りさせたとされています。
この伝承から、両神宮は、武神を祀る神社として、坂東武者から信仰されるようになりました。武道場に「鹿島大明神」や「香取大明神」と書かれた掛軸が対で掲げられることが多いのはこのためです。

香取神宮

大和朝廷からも特別な扱いを受けてきました。

古代、両神宮は、それぞれ「神郡」（一郡全域が神領）を領していました。神郡をもつ神社は少なく、いずれも軍事上・交通上の重要地であったとされています。

両神宮には、毎年朝廷から勅使が派遣されました。伊勢・近畿を除く地方神社において、定期的に勅使が派遣されたのは、両神宮と宇佐神宮（６年に１度）のみで、毎年の派遣があった両神宮は極めて異例の存在でした。

「延喜式」神名帳（平安時代の官社一覧）においては「神宮」と表記されました。当時、「神宮」と記されたのは、大神宮（伊勢神宮内宮）・鹿島神宮・香取神宮の３社のみでした。

摂家藤原氏からも崇敬されてきました。

藤原氏の氏社である奈良春日大社では、鹿島神が第一殿、香取神が第二殿に勧請されて祀られ、藤原氏の祖神、天児屋根命（第三殿）よりも上位に位置づけられています。

藤原の氏祖は中臣（藤原）鎌足です。
中臣氏は常陸国と深い繋がりがあり、平城京鎮護のために両神を春日大社に勧請したといいます。
この時、武甕槌命は白鹿に乗って三笠山に来たという伝説から、鹿を神鹿として保護敬愛するようになります。春日大社（奈良公園）の鹿は、鹿島神宮から連れてこられ神鹿の末裔というわけです。

東国の辺境にあった両神宮が、日本史上、重要な役割を果たすことになるのには、歴史的、地理的な理由がありました。

古代、両神宮の前には香取海という内海が広がっていました。

鬼怒川などによる長年の堆積作用と江戸幕府による利根川東遷事業により、今では内陸化していますが、水郷とよばれる土地柄や霞ヶ浦、印旛沼などの湖に内海の名残りを見ることができます。

内海一帯は、古くから水上交通を通じた独自の文化圏、経済圏が形成されていたようで、鹿島・香取の両神宮はその中心地だったようです。

古代、関東や東北地方は陸路が未発達で、畿内から東国への遠征軍の移動では海路がとられました。東征を進める大和朝廷にとって、湊を備えた兵站地としての両神宮は、戦略上の重要拠点だったようです。

当時、犬吠埼は太平洋の潮流が外洋に向かうため海運の難所でした。後年、ジョン万次郎がここで遭難したことはよく知られています。

畿内からの遠征軍は、一旦東京湾に入り、関宿を通って香取湾岸の両神宮に上陸したようで、ここから外洋にでて東北沿岸を陸伝い北上したとされています。

鹿嶋神宮の分社は約600社、東北へ向かって集中しています。

軍事的には、鹿嶋神宮が大和朝廷遠征軍の総司令部、東北地方の分社は征服地の橋頭保だという見方が考えられます。
神社には珍しく正殿が「北」を向いているのは、北方に睨みをきかせるため、と古くからいわれてきました。

一方、香取海は鬼怒川、利根川、荒川などを介して、関東一円と舟運で繋がっていました

香取神宮の分社は、関東地方を中心として約400社あり、利根川や江戸川沿いで中世以降に開拓された低湿地を中心に分布しています。東国統治の軍事政治拠点であり、物流交易の拠点でもあったのではないかと考えられます。

大和朝廷の勢力伸長の時代、国土幹線路の内海に面しておかれた、東国統治の拠点の名残りが、鹿嶋・香取の両神宮なのです。

まちあるきの考古学　ホーム